

E-5 国東地方におけるケガレ観念の変容
大分大教育 ○根茂美代子

目的 持に「血のケガレ」および「死のケガレ」など、ケガレ観念にわいてその変容をみた。生活の合理化などの進行にともないながら、かたや、生活共同体の維持または崩壊の過程のなかでどのように結びついていったか、それによって地域生活および個人の生活はどうなったかなどについてしらべ、将来、もしこのような地域で共同生活が再生していくとしたら、どのような視点をもちることが必要となるのかについての一資料としたい。

方法 国東半島部および姫島を含む国東地方一帯の血に関するもの（出産や月経）と死に関するものについて聞き取りを中心とした調査を行なった。調査期間は昭和55年6月より9月の間である。

結果 ①お産や月経に際して別火して家族と寝食を一般に分ける風習は、こゝ国東地方では昭和30年頃まで残っていたところがいくつかみられた。たいていは部落共同の例えば無常講の単位毎に一户というように、練壁で囲まれたヨツから始まり、次に各軒毎のシノニワへそして納戸へと産場所と月経（ホカ）時の生活場所との変遷は、別小屋生活の不便さの自覚とともに忌観念の薄らいできた変遷ともみられよう。②葬式や死のケガレに対するタガは比較的多くまた強く伝承されているが、儀礼そのものにしても古くからのものが割合残されている。無常講（約10軒15軒からなる）が単位となり、葬式に対して役を割合準備を進める。盆とくに初盆の行事は特有のものがみられ、新仏を仏壇から別に取出してまつり、親戚・知己・無常講あたりから金燈籠が供えられ競うばかりの部落もある。初盆の家では若い者に踊ってくれるようにたのんで15日にツボへ踊りにくる。など。